

障害児の発達援助について

川崎 育郎¹

(1998年11月13日受付, 1998年11月30日受理)

Counseling of Children with Handicap

Ikuro KAWASAKI¹

(Received : November 13, 1998. Accepted : November 30, 1998)

要 旨

本研究は、障害のある子どもの20年間の発達経過と養育者の発達援助におけるさまざまな悩みを縦断的に分析し、発達援助にとって何が大切であるかについて考察した。

I. はじめに

障害のある子どもの発達援助には様々な方法がある。子どもに直接働きかけて発達の援助を行う方法や養育者など子どもと関わる人に対して援助する間接的な発達援助がある。

養育者は障害のある子どもを養育する過程においてさまざまな悩みをもちそれに対応しなければならない。

本研究においては、良好な発達経過を示した障害のある子どもの幼児期から成人までの20年間の発達経過を分析した。その発達過程において、養育者は様々な悩みを抱えながら子育てを行った。本研究では、養育過程においてどのような問題が生じたのか、障害のある子どもの発達援助においてどのようなことが重要であるかについて考察を試みた。

II. 方法と対象

[方法]

言語遅滞を主訴として来談した1事例を対象とした。事例及び事例の家族との面接過程において得られた情報を分析の対象とした。

[対象]

表出言語がないという主訴で幼児期(2歳時)に来談した事例である。初回面接時においては全く有意味語の発話はなかった。eye-contactは充分とれなかった。遊びには片寄りがあり特定の遊びにこだわっていた。いろいろな物を一列に並べることが好きであった。

有意味語がなくこだわりが見られ、自閉的な傾向を有していた。

発達の状態(2歳11ヶ月時) :

乳幼児精神発達診断法 DA(1:11) DQ(66)
運動(2:6) 探索・操作(1:9)
大人との相互交渉(1:9)
子どもとの相互交渉(1:9) 食事(1:9)
排泄(3:0) 生活習慣(2:6)
理解(1:6)

1 高知女子大学社会福祉学部社会福祉学科 Department of Social Welfare, Faculty of Social Welfare, Kochi Women's University

〈幼児期前期〉

発達経過：有意味語の発語はなかった。言語理解については生活場面に関するものであれば、少しは理解できるようであった。2歳の終わり頃に保育所に入所した。保育所では独り遊びが中心であった。遊びには片寄りがあり興味の限局も見られた。

養育者が援助を必要とした事柄：ことばが話せないことを心配していた。いつ頃話せるようになるのか。このまま話さないのではないか。なぜことばが話せないのか。養育者の相談はことばの遅れに集中していた。

〈幼児期後期（3歳～6歳）〉

発達経過：表出言語については3歳過ぎに有意味語が数語でようになった。4歳の終わり頃には2語文がでるようになった。その後少しずつことばは増加し、就学直前には多語文で話すようになったが、助詞が抜けていて表出言語としては充分ではなかった。言語理解の発達も伸びて行き、6歳の終わり頃にWISCを実施した。動作性検査には充分のることができたが、言語性検査には言語理解が不十分のため十分にのらなかった。保育所では思うままに行動し、独り遊びが多く、設定保育場面に入ることはできなかった。年齢とともに少しずつ自分の保育室内で行動できるようになっていった。eye-contactも年齢とともに、とれるようになっていった。身辺処理は就学前にほぼ自立できるようになった。

養育者が援助を必要とした事柄：上記したように言語発達は少しずつ伸びていったが、養育者にとってはことばの発達がやはり気掛かりでありこの頃の相談内容の中心であった。日中は保育所での生活が中心であったので、養育者は園内での本児の行動について心配なことが多くさまざまなことを相談してきた。身辺処理についても他児と同様にはできないことが多くあり、どのようにすればよいのか具体的な方法の指導を求めた。

行動上の問題についての相談もいろいろあった

が、特に養育者が心配したことは保育園で他児と同じ行動がとれないことであった。自分の思うように行動したい傾向が強く設定保育場面にはほとんど参加できないで、保育室以外で自分のやりたいことをして楽しんでいる状態であった。他児との交流もしないで独り遊びが多かったので、養育者は対人関係についても不安を有していた。その他、毎日の生活において本児特有のこだわり（例：毎日の日課の順序やどこかに行くときの道順など）がありそのことに対してどのように対応して養育すればよいのかという悩みをもった。

就学が近づくると養育者は小学校への入学のことが気掛かりになり、文字、数、物の大小や色など学業に関する知識や技能について不安を持つようになり、そのような相談を受けた。就学先についても、校区の小学校の普通学級に入学できるのか、特殊学級で教育を受けたほうがよいのかあるいは養護学校を考えたほうがよいのかなどの相談があった。

〈学童期〉

発達経過：小学校は校区の学校の普通学級に入学した。就学直前の田中・ビネー知能検査では、言語の状態が充分でないため全ての検査はできなかった。ことばで表現をしなければならない問題はできなかった。しかし、WISCの動作性には充分にのることができた。少しバランスには欠けるが特別な問題はなかった。

言語発達は年齢と共に伸びた。入学した頃は通常の日常会話はできるが言語理解の面で不十分な状態を示していた。学習についてはアンバランスな状態を示した。非常に良くできる教科とできない教科があった。学校での行動ではさまざまな不適応行動が生じた。授業中に離席したり時には教室外に出ることもあった。物事がうまく行かない時にパニックに陥ることも頻回にあった。パニックに陥ると大声を発して暴れることもあった。担任の先生に対して反抗的になり素直に指示をきかないこともあった。提出しないといけない課題も

提出しないこともあった。友人関係において孤立状態であり、独り遊びがほとんどであった。班で何か作業をしたり行動するときでも仲間に入らなかった。このような状態であったのでいじめの対象になることも頻回にあった。遊びにはこだわりがありいつも紙にじぶんの関心のあるものを描いて楽しんでいた。放課後も友人と遊ぶことはなく独りで自分の好きなことをして楽しんでいるようであった。高学年になった頃、養育者と先生とクライアントを含めた話し合いの中で少しずつクライアントに変化が生じ、友人への同調的行動が見られるようになってきた。

養育者が援助を必要とした事柄：最初の主訴であったことばの遅れは年齢と共に伸びていったので、ことばについての相談はかなり減少した。

教科の学習について）特定の教科が極端にできないことについて家庭でどのように指導すればよいか。勉強が理解できない時にはパニックを示すのでそのような状況にどのような対応をすればよいか。学校において関心のない教科については意欲がなく黑板にかかれたことをノートにとらないし教科書も開こうとしない。関心のない教科で課題として与えられた提出物は全く提出しない。

学校での行動上の問題）不機嫌になると全く行動しなくなる。集会などのとき一緒に並ぶことができない。奇声を発することもある。時にはパニックに陥り暴れたりする。班に入ろうとしないで班活動もしない。クラスの中で独りぼっちである。

その他）このまま普通学級で教育を受けるよりは、特殊教育を受けたほうが良いのではないだろうか。考えに柔軟性がなく融通がきかないことについてどのように対応すればよいか。

〈中学校期〉

発達経過：校区の中学校に進学した。学校が変わり先生や友人も変わったために、本児のことを理解してくれていた人もいなくなり、かなり不安定な状況に陥っていった。本児の有しているこだわりや融通のきかないかたくななパーソナリティ

が影響して、先生や友人との対人関係において頻繁にトラブルが生じるようになった。ちょっとした行き違いから、本児は自己の意見を主張して変えようとせず、時には興奮してパニックになることもあった。このようなことが生じる度に本児は友人を避けるようになり孤立していった。学校と養育者が密接に連絡を取り合って本児のことについて協議した。学校は専門機関にも相談し本児のことについて理解を深めていった。学校の理解が深まり、本児は徐々に学校生活に適応していき友人との関係も良好な方向に進んでいった。

養育者が援助を必要とした事柄：中学校生活に不適応な状態になっておりどのような対応をすればよいのか。融通のきかない固い思考を柔軟に考えるようにするにはどうすればよいのだろうか。家庭では特別な問題はないが、学校生活においては孤独であるように思われ家族としてどのようなかかわりをすればよいか。中学校卒業後の進路についてどのように考えればよいか。

〈高等学校期〉

発達経過：進路についてはいろいろと迷ったが進学することになり受験し、本児の希望の高等学校に合格した。本児の表出言語についてはほとんど心配なことはなくなり、他者との会話は非常に流暢にできるようになった。学業面については調子の悪い教科はあったようであるが特別問題になるようなことはなかった。対人関係においては、相変わらず友人とのかかわりを求めず独りでいることが多かった。サークルに入ることもなくマイペースの生活を守った。中学校期のように対人関係においてトラブルを生じるようなことはなかった。

養育者が援助を必要とした事柄：特別な心配はなかったが下記のような対人関係上のことを心配した。

友人関係において孤立しているのではないだろうか。話し相手はいるだろうか。

3年生になり養育者は本児の就職のことで悩ん

だ（どのような職業が本児の性格に向いているのか、就職先があるだろうか）。

〈高等学校卒業後〉

学校の世話で就職試験を受験し採用された。本児は大変喜び卒業後頑張って仕事をした。社会人になり仕事をするようになり、より一層ことばや社会性に良好な変化が生じた。しかし、数年後仕事をやめるような状況が生じた。新しい仕事に就いたが上司との人間関係にトラブルが生じた。養育者の努力で上司の理解が得られ落ち着いて仕事をするようになった。

養育者が援助を必要とした事柄：養育者としての悩みは仕事の面で順調に毎日の生活ができるようになることであった。非常にまじめに働くことができるが、少し融通がないことが対人関係におけるつまずきの原因になるのでどのように教えてやればよいだろうかということであった。それから余暇の過ごし方が気にかかるということであった。もう少し楽しむようなことをしたらどうかと思うということであった。

以上、幼児期から社会人になるまでの発達の経過と各時期における養育者の相談内容についてみてきた。各時期において養育者が援助を求めた事柄については Table. 1 にまとめた。

Ⅲ. 考 察

発達障害を有していた事例の20年間の発達経過とその相談内容を分析した。結果で示したように養育者はその間さまざまな不安や悩みを抱いた。幼児期においては、主訴であったことばの遅れや、保育所での不適応行動について心配した。小学校期では学校での不適応行動や友人関係における心配をもった。中学校期においても不適応行動や友人関係の問題が中心であったが養育者と学校の協力で徐々に改善されていった。高等学校期には行動上の直接的な問題は養育者の心配としてほとんど生じなかったが、対人関係における内閉的傾向について強い不安を有した。養育者は、本児が社会人になってからも対人関係の特徴と融通のきかないパーソナリティについて強い不安を有した。事例の各発達期において数多くの問題が生じたが、養育者はそのつど関係者に相談しながら家族でクライアントを支えていった。時には関係者に養育者が積極的に働きかけその熱意でもって影響を与えていったように思われた。養育者が悩んだ時には関係者に積極的に相談もした。養育者がクライアントに対してプラスになると思われることは毎日の生活に取り込んでいった。このような養育者の前向きな養育姿勢はクライアントの発達に大き

Table 1. 各時期において養育者が援助を求めた事柄

幼 児 期	① 言語発達について ③ 集団生活への適応について ⑤ 就学先について	② 行動上の問題 ④ 発達の遅れ全般について
学 童 期	① 学業面について（特定の教科） ③ 対人関係（主として友人関係） ⑤ 就学先について	② 学校生活に不適応・行動上の問題 ④ 性格上のこと
中 学 校 期	① 学校生活に不適応・行動上の問題 ③ 性格上のこと	② 対人関係（主として友人関係） ④ 進路について
高 等 学 校 期	① 対人関係（主として友人関係）	② 就職について
高等学校卒業後	① 仕事と対人関係	② 余暇の利用について

く影響したと思われる。障害のある子どもを養育していく場合、事例で示したように様々な予期できない問題が生じてくる。養育者はこれらの問題に的確に対応していかなければならない。養育者が十分に諸問題に対応できるためには様々な援助者(機関)が地域で一体になることが大切であることを事例は示唆している。

参考文献

- Barkley, R. A. 1998 Attention Deficit Hyperactivity Disorder Guilford Press
- Betchman, J.H., Brownlie, E. B., Inglis, A., Wild, J., Freguson, B., & Schachter, D. 1996 Seven Year Follow-Up of Speech/Language Impaired and Control Children : Psychiatric Outcome. Journal of Child Psychology and Psychiatry, Vol.37, 8, 961-970.
- 後藤毅, 川田端啓之 1996 初診から40年経ったケース 児童青年精神医学とその近接領域 Vol.37, 3, 297-303.
- Sparrevohn, R. & Howie, P. M. 1995 Theory of Mind in Children with Autistic Disorder: Evidence of Developmental Progression and the Role of Verbal Ability. Journal of Child Psychology and Psychiatry Vol. 36, 2, 249-263.
- 杉山登志郎, 高橋脩, 石井卓 1996 自閉症の就労を巡る臨床的研究 児童青年精神医学とその近接領域 Vol. 37, 3, 241-253
- Venter, A., Lord, C. & Schopler, E. 1992 A Follow-Up Study of High-Functioning Autistic Children, Journal of Child Psychology and Psychiatry, Vol.33, 3, 489-507.